

## 「言語獲得」とはどういうことか

矢沢国光

### 0 はじめに

「聾学校の役割の一つは、聴覚障害の子どもたちの、コミュニケーション・言語能力を育てることである。」

と書けば、みなさん、「その通りだ」とうなずくでしょう。でも、この短い文章の中にも、たくさんの問題が潜んでいるのです。

・わたしたちはよく、「コミュニケーション・言語」とまとめて言いますが、「コミュニケーション」と「言語」とは、同じ？それとも、ちがうものでしょうか？ちがうとすれば、どこがどう違い、この二つの間に、どのような関係があるのでしょうか？

・コミュニケーション・言語力を「育てる」とありますが、言語力は、「育てる」ものでしょう、それとも「教える」ものでしょうか？

・最近よく「言語環境を作る」という言い方をしますが、「言語環境を作る」と「言語を育てる／教える」とことは、ちがうのでしょうか？

・そもそも「言語」とは何でしょうか？「手話も言語だ」といわれますが、言語と言語でないもの（非言語）とは、どうやって、区別されるのでしょうか？「言語」は「非言語」に対して、どんな特徴や優れた点があるのでしょうか？

・「言語能力」とは、どんな能力でしょうか？それは、物事を認知する力や、人と関わる力と、どんな関係にあるのでしょうか？

・「言語を獲得する／習得する」と言いますが、言語の何を獲得／習得するのでしょうか？

\*

言語学の本は、たくさんあります。とくに、小泉保著『日本語教師のための言語学入門』（大修館書店 1993）は、標題の通り、日本語を（外国人に）教える教師にとって、——ということは、言語学の素人にとって——とても役立つ、しかも、わかりやすい本です。

小泉保先生は、じつは、私が県立静岡高校の生徒のとき（五十年も昔の話ですが）、3年間英語を教わった先生です。小泉先生が東大の言語学科を卒業して、高校生に英語を教えながらこつこつ言語学の研究に打ち込んでいた20代の後半に、私は、言語学にはまったく無縁の一高校生として、英語を教わる幸運に恵まれたわけです\*1。小泉先生は、その後、日本言語学会の会長になりました。文字通り日本の言語学界の第一人者ですが、厳

---

\*1 三木卓の『芝笛と地図』という静岡高校時代を書いた小説に、なぜか実名で登場します。

密な理論を、身近な例を引いて、素人にもわかるように書くことに——これはすぐれた学者の条件です——たいへん長けています。日本語についての知識は、この小泉先生の著書で、十分だと思います。

\*

ろう学校教師が「日本語教師」と違うのは、第一に、言語指導の対象が、大人ではなく子ども——それも言語をまったくもたない赤ちゃんから——ということです。第二に、日本語だけでなく、手話も扱うことです。第三に、教師が教室で教えるだけでなく、生活全体を通して——親の子どもに対する関わりの支援も含めて——言語発達を支援する、ということです。

だから、『ろう学校教師のための言語学』は、『日本語教師のための言語学』よりも、言語をより広い視野の中で扱う必要がでてくると思います。

\*

たまたまウィトゲンシュタイン（1889-1951）という言語哲学者の伝記を読んでいたら、次のようなことが書いてありました。

彼は、言葉の意味とは何か、ということ突き詰めて考えました。

彼は始め、「言語は世界の写像である」と考えました。言語と世界とは、同じ構造を持っている。だから言語は世界を写すことができる、と考えたのです。彼はその考えを『論理哲学論考』という書物にまとめました。彼は、「これで哲学の問題はすべて解決された」と考えて、オーストリアの田舎町に行き、小学校の教師をしました。数年で小学校の教師を辞め、イギリスの大学に招かれて、言語哲学の研究を再開します。

彼の後半生の思索は『哲学探究』という書物になって、死後、刊行されますが、その中では、以前に書いた『論理哲学論考』を全面的に否定しました。彼は、新たに「言語ゲーム」という考えを提出し、「語の意味とは、言語のなかでのその使用である」と言い出したのです。しかし、ウィトゲンシュタインは、「言語ゲーム」という方向性を提起しただけで（62歳で癌でなくなったので）、その新しい言語哲学を完成することなく、終わってしまいました。

ウィトゲンシュタインの言語に対する見方は、あまりに極端に変わったので、「前期哲学」「後期哲学」のように呼ばれたりします。

私が面白いと思ったのは、彼が言語についての見方を変えた一つのきっかけが、小学校で教えた経験であったということです。

たった数年間の小学校での教職体験が、言語に対する見方を変えてしまった。それは、言い換えれば、既成の「言語学」がすくい上げることのできない言語学的事実が、いっぱい「言語現象の現場」には横たわっている、ということです。

「言語学」の本をいくら漁っても、ろう学校で役立つ知識がなかなか得られない。それは、「言語学」が、言語の実際の姿——ウィトゲンシュタインのいう「言語ゲーム」——から離れたところで、作られているからではないでしょうか。

\*

ろう学校の教師——特に早期教育の教師——は、子どもの言語発達を、日々、継続的に観察できるという特権を持つ唯一の職業です。と同時に、普通なら必要のない「言語指導」を小さな子どもやその親に対して行う唯一の職業でもあります。それはまた、「言語学」が仕事のツール（道具）として役立つ唯一の職業、といってよいかもしれません。

それだけに、言語についてのちょっとした勘違いが、とんでもない迷惑な結果を引き起こす職業でもあります。

というわけで、聾学校教師という職業に役立つ「言語学」が生まれる一つのきっかけになれば、と願って、この連載を始めたいと思います。

## 1 「言語獲得」とはどういうことか

幼児向けの『ひらかなカード』が市販されています。その一枚のカードを取ってみると、例えば、片側に「やま」という文字（つまり、言葉の形）があり、その裏側に山の絵（つまり、言葉の意味）があります。言葉というものは、このカードのように、「言葉の形」と「言葉の意味」が、裏表に合わさって一つの言葉が成り立っています。

「言葉の形」には、今見た「ひらがな」の他に、漢字、指文字、点字、キューサインなどがあります。これらはいずれも日本語の形——その視覚的表示手段（広い意味での文字）——ですが、順序からいえば、日本語の形としては、文字の前に、「日本語音声」があります。

また、日本語以外の言語について「言葉の形」を挙げれば、英語の音声と文字、手話の身体表現も「言葉の形」です。

言葉が使えるようになるためには、「言葉の形」を受信・発信できるようにならねばなりません。日本語が聞いてわかるためには、日本語の音声を聞いて、それを「日本語の形」として認知する必要があります。

「日本語の音声を聞く」と「日本語の形として認知する」と、わざわざ二つに分けて述べたのは、理由があります。それは、音声語は、日本語でも英語でも、「言葉の形」は、ごく少数の「音素（音韻ともいう）」の組み合わせで出来ており、「言葉の形の認知」とは、聞いた音声を頭の中で処理し、音素の組み合わせとして改めて認知する、ということだからです。

「オハヨーゴザイマス」という発話（スピーチ）は、音声を物理的に解析して、グラフに表せば、連続的なグラフになります。物理的には、オ、ハ、ヨー、…のように分かっているわけではありません。その連続的な音のつながりから、日本語の音として使われるオ、

ハ、ヨ一、…を抽出するのは、頭の中の働き（処理）です。その抽出（処理）作業を経て「言葉（日本語）の形の認知」がなされるのです。

日本語音声 ⇒ （頭の中での処理） ⇒ 日本語の形として認知

日本語は、カ キ ク ケ コ キャ キュ キョ…のように、すべての音節（発話の中で、一つの母音を中心として、まとまった部分）が母音で終わる（開音節）ので、文字（ひらかな、カタカナ）も、子音+母音の1音節を1文字で表しています。だから、発話を、音素の組み合わせと見るよりも、音節の組み合わせと見る方が、話が簡単になります。

日本語の母音は、アイウエオの5個しかありません。器械で音声の波形を調べれば、もっとたくさんの種類に分かれるでしょうが、日本語として区別されるのは、この5種類だけです。子音も、「ヂ」と「ジ」は、昔は別の音でしたが、今は、区別されません。このように、日本語として区別される音節を数え上げていくと、およそ100個になります。「五十音表」といわれますが、日本語話者の頭の中には、じつは、「百音表」ができているわけです。詳しいことは、前述の小泉保先生の著書をご覧ください。

日本語音声を聞いて、日本語の形として認知する能力は、赤ちゃんが先天的にもって生まれる能力ではありません。赤ちゃんが生まれたときから〔母親の胎内にいるときから、という説もあります〕、繰り返し日本語で話しかけられて、その結果、頭の中に形成されるものとされています。つまり、頭の中に、音声を日本語の音節としてパターン認識する「網の目」のようなもの——日本語音節の「百音表」のようなもの——が形成される、と考えられます。

手話の場合も、「手話の音素」に相当する「手話素」といったものがあり、「手話素の網の目」が頭の中に形成されることによって、連続的な身体表現を見ても、その中から「手話の形」を認知することが出来るようになる、と考えられます。[私もそうですが、手話を学習中の健聴者が、ろう者の手話を見ても読みとれない最大の理由は、手話の形を認知する網の目が形成されていないからだといわれます]。

日本語にせよ手話にせよ、聞いた音・見た形を、「言葉の形」として認知する能力の形成が、どのようにしてなされるか、それを促すためには、どのような指導なり訓練が有効なのか、については、あとで取り上げたいと思います。

ここでは、言葉には「形」と「意味」の両面があり、それに伴って、「言語獲得」にも、その一つの面として、「言葉の形」を認知する能力の獲得（形成）がある、ということを確認しておけば、十分です。

\*

言葉は、すでに見たように、形と意味が1枚のカードの裏表に貼り付いたようなもの

です。それ故、「言葉の獲得」と言えるためには、「言葉の形」がわかるだけではだめで、その裏側にどんな「意味」が貼り付いているのか、知らねばなりません。

ここで大きな問題になるのは、「言葉の形と意味の結合の仕方は、恣意的である」（恣意性）ということです。「恣意的」とは、必然性がない、約束に過ぎない、ということです。

「恣意性」の反対は、「写像性」です。言葉の形と意味の間に関係があり、形からあるていど意味が想像できる場合「（言葉の形と意味の間に）写像性がある」と言います。<sup>\*1</sup> 手話には、写像性のある（残っている）単語がたくさんあります。手話の（食べる）は、人差し指と中指の2本の指をそろえて口に運びます。箸で食べる仕草を写像した形です。アメリカ手話では、5指でつまんで口に運ぶ仕草になります。

手話単語でも、写像性の全くないものもあります。左右の手で指文字「る」を作って上下に置く（ルール）は、日本語から来た手話で、その形そのものには「ルール」を想像させるものは、何もありません。（文）の手話の形も、語源は、封筒に、文章を書いた紙を入れる仕草にあるようですが、形だけ見て、意味を想像することは出来ません。

手話の場合も、基本的には、形と意味の関係は恣意的、と言えるでしょう。はじめは写像性の強かった手話が、だんだん写像性が薄れて恣意性が強くなります。これは、手話に限らず、言語の進化の法則といってよいと思います。その原因としては、（文）の手話のように「語源をみなが忘れてしまった」というだけでなく、「既知の言葉が未知の意味を表すために使用される」という、言語の本質に関係があるのですが、そのことについては、のちに改めて、述べたいと思います。

ここで重要なことは、「言葉の意味」は「言葉の形」からはわからない、ということです。日本語の音声を聞いても、そして、それを日本語の音の形として認知したとしても、それだけでは、「言葉を聞いてわかった」とはならないことです。形を知っただけでは、まだカードの片側を手に入れただけです。もう片方の「意味」を手に入れて初めて、「言語を獲得した」といえます。

\*

このこと、つまり、ことばの獲得において、「言葉の形」と「言葉の意味」は、別々にやってくる、ということは、言葉の全くない赤ちゃんについて考えると、はっきりします。というのは、私たち成人が英語を学習する場合は、英語の形（音声、発音）と同時に、その意味を日本語で教えてもらうことが出来ます。ところが、赤ちゃんには、言葉の意味を

---

\*1 ふつう、「恣意性」の反対は「有縁性」と呼ばれます。手話の場合は、この「有縁性」が、事物の動きや形を写したために生じているので「写像性」とも言われます。ここでは、「写像性」を音声語のばあいにもまで広げて、「有縁性」と同じ意味に使います。

言葉で教えたりすることは、出来ません。赤ちゃんに、言葉の形は与えることが出来ますが、言葉の意味を与える（教える）ことは出来ないのです。言葉の意味は、その場面の中で、言葉以外の手がかりによって、——つまり非言語的手段によって——赤ちゃんが自分で直感的につかむしかないので、これは、聞こえる・聞こえないに関係がなく、すべての赤ちゃんについていえることです。<sup>\*1</sup>

このことを明快に指摘したのは、元筑波大学附属聾学校幼稚部主事の岩城謙です<sup>\*2</sup>。

「言語的手段は、本来、言語の形態的情報しか運ばないもので、それから自動的に意味が引き出せるというものではない。…赤ちゃんは、そこから直感的に意味が引き出せる非言語的手段によって、人とのコミュニケーションを始め、それと同期して、言語（）を聞いているうちに、次第にこれに意味が結びつき、形態と意味の統一体としての言語が形成されていくのである。赤ちゃんにとって意味的情報を運ぶのは、まず場面や身振りなどの非言語的手段であって、言語は最初は形態でしかない。」

そして「子どもが最初に獲得する言語は、コミュニケーションの機能を持つ言語であるが、そのような言語は、コミュニケーションの場を離れては、獲得することが出来ない」として、「コミュニケーションの中での言語獲得」（自然法）の必然性を、岩城は説いています。

言語獲得とは、言葉の形と意味が別々に入ってきて、両者が頭の中で結合することである——さしあたって、このように言ってよいでしょう。

「非言語的手段によって」言葉の意味を獲得する——言葉を使わないで言葉を獲得する——という、ひじょうに不思議な、神秘的な、メカニズムが、言語獲得には潜んでいるのです。

そして、この不思議を解明するカギは、「コミュニケーション」にある——岩城を始め、聴覚障害教育の関係者の発見したこの事実は、「言語」についての見方にも、変更を迫るものでした。

【つづく】

---

\*1 ヘレンケラーが、井戸の水を手のひらに受けているとき、家庭教師のサリバン先生がヘレンケラーのもう一つの手にWATERと書いた。その瞬間ヘレンケラーは、「モノには名前がある」ことを発見した、と伝えられています。ヘレンケラーが発見したのは、正確に言うと、「モノには名前がある」ことではなくて、WATERという「形（手に書いた文字）」が、水という意味を表している、ということです。ヘレンケラーは、この井戸体験のとき2歳で、その前に（水）という概念は、すでに持っていたのです。赤ちゃんの言語獲得とは、事情が違います。[WATER という英語も知っていた？]

\*2 岩城謙、聴覚障害児の言語とコミュニケーション、教育出版 1986

